

盛岡市遺跡の学び館 第17回企画展

安倍氏最後の拠点

厨 川



2019年10月

盛岡市遺跡の学び館

ごあいさつ

平安時代の11世紀、陸奥国の奥六郡は、陸奥鎮守府胆沢城の管轄下にありました。安倍氏も鎮守府の役人でしたが、安倍頼時の祖父忠良、父忠頼のころには、鎮守府の役人を代表する立場にありました。11世紀半ば、安倍頼時は奥六郡各地に一族や郎党を配置し、地域統治の拠点としておりました。当時、奥六郡より北の地域は国の領域外であり、そこには、蝦夷と呼ばれた人々が生活しておりましたが、彼らによって、北方海域のアザラシの毛皮、鷲の羽、昆布などの産物は、陸奥の馬、金とともに、都で大変珍重されました。北の海域との交易とともに、陸奥国の馬、金をはじめとする貢納は、安倍氏の重要な職務でした。このように安倍氏は奥六郡で台頭しながらも、北の境界地域において、交易活動や地域間の諸問題にも対峙するという、難しい立場にあったと思われます。こうした中、安倍頼時は、蝦夷の反乱に与したとの風評から、心ならずも陸奥国府と対立。新任の陸奥守源頼義との間で戦端が開かれ、落命します。以後、安倍氏は厨川次郎貞任を中心に結束しますが、康平5年（1062）、出羽の清原武則が源頼義に合流すると劣勢となり、貞任の拠点、岩手郡厨川まで後退します。同年9月17日、安倍貞任らの奮戦もむなしく、厨川柵、姫戸柵は陥落。ここに安倍氏は滅びました。しかし、安倍氏が目指した政権構想は、清原氏、平泉藤原氏を経て、源頼朝の鎌倉幕府へと引き継がれました。安倍氏は中世の黎明ともいわれるゆえんです。

今回の企画展は、厨川地域と関連遺跡の発掘調査成果を広く紹介しながら、安倍氏最後の拠点となった、厨川柵・姫戸柵について考察を加えます。皆様の御来館をお願いしますとともに、本企画展開催にあたり、御指導と御協力をいただきました皆様、関係機関に対し厚く御礼申し上げます。

令和元年（2019）10月5日

盛岡市遺跡の学び館

■ 盛岡市遺跡の学び館第17回企画展

会期 令和元年（2019）10月5日～同2年（2020）1月19日

会場 盛岡市本宮字荒屋13番地1 盛岡市遺跡の学び館企画展示室

主催 盛岡市遺跡の学び館

後援 岩手考古学会、岩手史学会、岩手日報社、朝日新聞盛岡総局、読売新聞盛岡支局、毎日新聞盛岡支局、時事通信社盛岡支局、共同通信社盛岡支局、河北新報社、産経新聞盛岡支局、デーリー東北新聞社、盛岡タイムス社、NHK盛岡放送局、IBC岩手放送、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、岩手ケーブルテレビジョン、エフエム岩手、ラジオ・もりおか、アキュート、マ・シェリ、情報紙ゆうゆう

■ 特別講演会

講師 岩手大学人文社会科学部教授 樋口知志氏

演題 「安倍氏と前九年合戦」

日時 令和元年（2019）11月10日（日）13時15分～14時45分

会場 盛岡市遺跡の学び館研修室

■ 鼎談

演題 「安倍氏と柵を語る」

パネリスト 岩手大学人文社会科学部教授 樋口知志氏

金ヶ崎町教育委員会 浅利英克氏

盛岡市遺跡の学び館 室野秀文

日時 令和元年（2019）11月10日（日）15時00分～16時00分

会場 盛岡市遺跡の学び館研修室

■ 関連講座（2019年度学芸講座Ⅲ）

講師 当館文化財副主幹 室野秀文

演題 「厨川柵と姫戸柵」

日時 令和元年（2019）11月3日（日）13時30分～15時00分

会場 盛岡市遺跡の学び館研修室

-凡 例-

- 1 本書は、盛岡市遺跡の学び館第17回企画展「安倍氏最後の拠点 厨川」の展示図録である。
- 2 展示資料名、遺跡名、年代、挿図の内容等について、各遺跡発掘調査報告書記載内容と、本図録の記載内容が異なる場合があるが、その場合は、本図録作成者である当館に責任がある。
- 3 本書の資料掲載順序は、展示の順序と必ずしも一致していない。また、掲載資料の中には、今回展示されていない資料も存在する。
- 4 掲載写真の内、提供者名の記載がないものは、当館撮影または所蔵の写真である。
- 5 本企画展、および図録の作成は、盛岡市遺跡の学び館 福田淳、三浦志麻、菊地幸裕、津嶋知弘、今野公顕、花井正香、佐々木亮二、菊池好文、鈴木俊輝、今松佑太、佐々木あゆみ、金俊教が協力してあたり、室野秀文、千葉貴子が編集した。
- 6 企画展開催、及び本書の作成にあたり、次の機関・方々より御指導・御協力をいただいた。
岩手県教育委員会生涯学習文化財課、岩手県立博物館、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、岩手町教育委員会、金ヶ崎町教育委員会、滝沢市教育委員会、東北歴史博物館、浅利 英克、井上 雅孝、金子 佐知子、亀井 淳、西郷 和子、佐々木 健一、篠原 理恵、菅原 修、西村 佳菜子、羽柴 直人、濱田 宏

-目 次-

ごあいさつ

- I 奥六郡と安倍氏の台頭……………4
- II 安倍氏の柵と居宅……………7
- III 厨川柵・姫戸柵……………14

【コラム】安倍頼時の北行について ……24

【前九年合戦の経過】……………25

【引用・参考文献】……………26

【安倍・清原・奥州藤原氏関係系図】……………27

【関係史料】……………巻末1

・表紙写真 赤裳遺跡RE01竪穴建物跡轆轤（ロクロ）穴の土器出土状況

・裏表紙写真 赤裳遺跡RE01竪穴建物跡

Ⅲ 厨川柵と姫戸柵 — 安倍氏最後の拠点 —

1 厨川の地形と遺跡

厨川は、北上川と雫石川合流点の北西側に位置する。その主体は、北西の岩手山を起源とする火山灰砂台地（滝沢台地）で、盛岡市のみたけ、青山町、大新町、大館町、前九年一〜三丁目、上堂、安倍館町に及んでいる。台地の西側を諸葛川、南側を雫石川、東側を北上川に限られており、標高は盛岡市青山町付近で149m、前九年二丁目付近が136m〜139mである。台地の西側は比較的なだらかな起伏で河川や沖積地に接している。南側も比較的なだらかな地形ではあるも、稲荷町から天昌寺町付近には、滝沢台地よりも新しい雫石川や諸葛川による河川堆積物の砂礫段丘が連なり、天昌寺町東側から北上川に至る間は、滝沢台地南辺が直

接旧河道に面し、その比高差は4m〜8mに及ぶ。また北上川沿いの館坂から安倍館町は、急峻な段丘崖が続き、比高差は20mを越えている。

滝沢台地縁辺部には縄文時代から中世、近世に至る遺跡が確認されている。11世紀の遺構や遺物は西青山町の境橋遺跡、赤裳遺跡のほか、稲荷町遺跡、宿田遺跡、上堂頭遺跡でも確認されている。稲荷町遺跡と里館遺跡には12世紀の居館、城館があり、里館遺跡、安倍館遺跡では中世工藤氏の城館が確認されている。江戸時代は南部氏の盛岡城下の北西側で鹿角街道、秋田街道が通じていた。また安倍館は、江戸時代初期には「阿部貞任、宗任陣場」と伝承されていた。

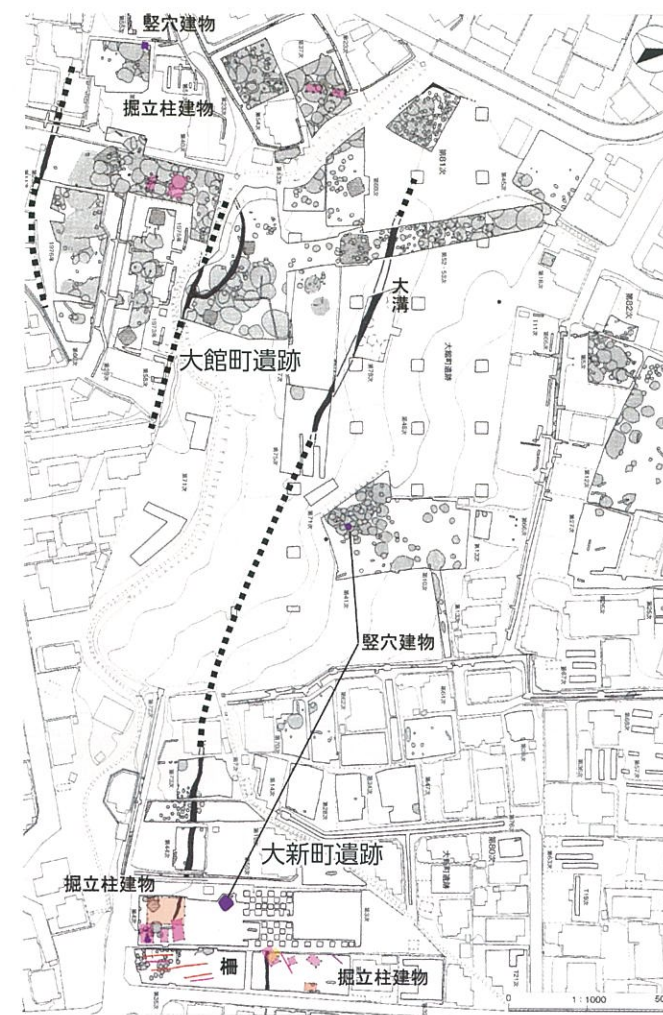


厨川の地形と遺跡

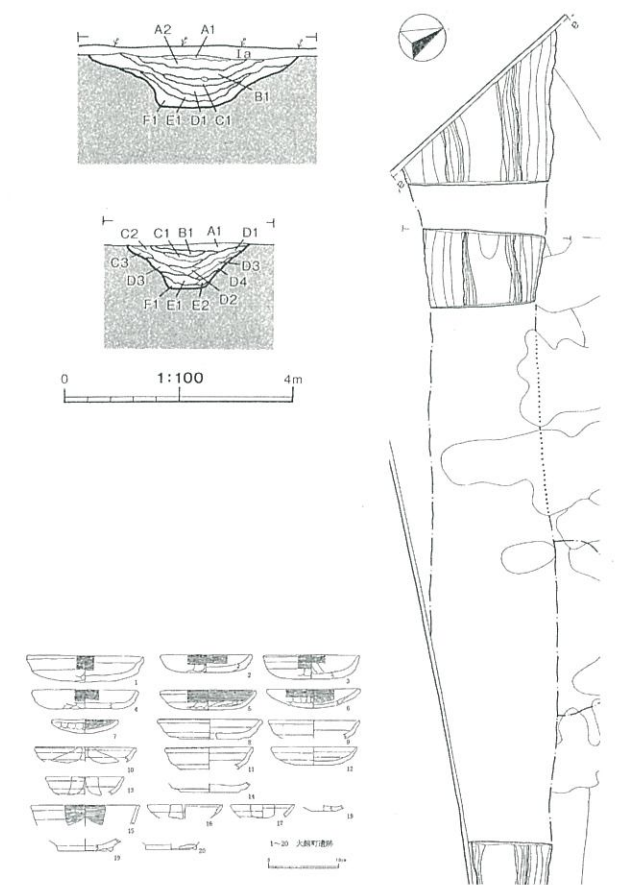
(1) 11世紀の遺跡

滝沢台地南西縁の大新町遺跡では、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、柵・柱列跡、大溝、溝、土坑が確認されている。竪穴建物と土坑、柱穴からは、土師器坏、高台坏、小形坏、小皿、甕が出土している。高台坏はロクロ成形の後、内面、或いは内外両面を丁寧にヘラミガキと黒色処理を施した土器である。小形坏と小皿は赤褐色または浅い黄橙色に焼かれたロクロ成形の土器である。また東隣の小屋塚遺跡でも掘立柱建物跡や竪穴建物跡が確認されており、大新町遺跡出土土器に近似した土師器高台坏が出土している。大新町遺跡西隣の大館町遺跡（岩手県指定史跡）では、遺跡の地形に沿った大溝や溝などが確認されており、大新町遺跡出土土器に近似した土師器高台坏破片のほか、12世紀後半の手捏ねカワラケがまとめて出土し

ている。ほかに平安時代後期の土師器甕が出土した小形の竪穴建物も存在する。西青山三丁目の境橋遺跡では、諸葛川の旧河道付近から11世紀の土師器高台坏が出土している。上堂頭遺跡では仏堂または社殿と考えられる2間×3間の掘立柱建物の雨落溝から、土師器坏と高台坏が出土している。前九年二丁目の宿田遺跡では、古墳時代終末期（7世紀）の古墳周溝の埋土上部、十和田A火山灰層（915年降下）の上から、11世紀前半の内面黒色処理の土師器高台坏、小形坏が出土している。ここは滝沢台地南端であり、宿田の地名は宿、宿立、宿館など、城館の近傍によく見られる宿地名である。柵に関連する宿が想定される。



大館町・大新町遺跡の遺構

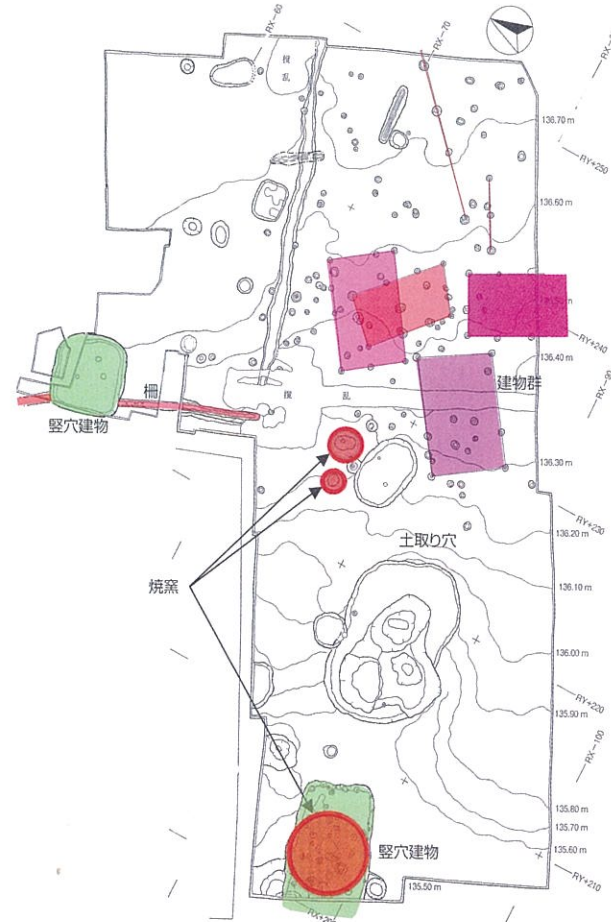


(2) 赤裳遺跡

赤裳遺跡は盛岡市西青山一丁目にあり、滝沢台地の西側に位置する。北西700m付近には境橋遺跡、南東900m～1200mには大館町遺跡、大新町遺跡が存在する。赤裳遺跡は平成12年（2000）以後、宅地造成や個人住宅建築に先立ち、8箇所の発掘調査が行われた。このうち、平成26年度の第3次調査、平成27年度の第4次調査、平成30年度の第8次調査では、11世紀の掘立柱建物跡4棟、竪穴建物跡2棟、柱列2列、柵1列、土坑14基、土器焼成遺構3基が確認された（盛岡市教育委員会2018他）。土器焼成遺構3基のうち1基は5.6m×7.2m以上の大形竪穴建物跡の窪地を活用した窯である。竪穴建物跡の竪穴は主な柱穴は6箇所、1間×2間の配置であり、東端の柱穴は竪穴東壁に接していることから、屋根は東側が切妻、西側が寄棟の形状であったと推定できる。竪穴内中央部には大きな炉があり、ほかに東側に4箇所の小さな炉が認められる。竪穴の南側から東側にかけて、白色粘土の集積と貼床があり、中央の炉の南西側には、貼床上から掘り込まれたロクロ穴が一基存在する。竪穴の出土遺物は北壁よりの床面から使用痕のある砥石、土師器のロクロ高台坏、ロクロ坏、ミニチュア土器が出土したほか、刀子や紡錘車の欠損品、鉄鏝の一部や、鉄滓が出土した。竪穴北東部には小形の炉が二つあり、竪穴内に鉄素材が集められていることから、ここで小鍛冶作業が行われていたらしい。また南西部の床面からはロクロ小皿が5点まとまって出土した。貼床上から掘り込まれたロクロ穴は、回転軸を固定する穴があり、軸の根本は小石と粘土を充填して固定している。ロクロの撤去後、穴の上部に33個体のロクロ坏、ヘラミガキの高台坏1個体が重ねられて残されており、その状態から蹴ロクロ廃棄に伴う儀礼行為と考えられる。

この竪穴はロクロ穴が掘り込まれる以前には南壁から東壁近くに白色粘土が集積されており、小鍛冶等の作業場であると共に、土器の原材料を保管する倉庫として使用されていた。そして灰白色粘土で貼床が行われ、蹴ロクロが設置されて土器

の成形作業が行われた。その後、建物の上屋を撤去し、竪穴を活用して土師器の焼窯としたことが判明した。中央部の炉の上には大量の土器が集積され、焼成されていた。これに混じって、土製の糞子や粘土を平たくした焼台、手捏ねの小皿やロクロ成形後手捏ねした小皿も出土した。土器類が集積された周囲には木炭など炭化物の混じる焼土層が形成されていた。



赤裳遺跡全体図



土師器焼窯

第8次調査で確認された竪穴建物は、4.8m四方で深さ40cm～45cmの規模である。埋土から土師器ロクロの小皿が1点、内面黒色処理の土師器坏破片が出土している。この竪穴に掘り込まれる溝は柵であることが確認されている。

竪穴建物以外の土器焼窯は第3次、第4次調査で2基確認された。このうち1基は径2m余、深さ32cmの皿形の土坑で、埋土中間層に焼土混じりの灰が厚く堆積し、その上面に土師器ロクロ小皿が4個体置かれていた。この焼成窯の内部からは、土師器ロクロの坏、高台坏、小皿のほか、内面黒色処理の坏、高台坏が大量に出土したほか、手捏ねの小形甕も出土している。残り一基の窯は径1.4m、深さ20cmの窯で内部からロクロ坏、小皿、土師器甕の破片が出土している。

赤裳遺跡の土器は、土師器が主体で須恵器は小破片が少量出土している。土師器はロクロ成形の小皿、坏、高台坏、小形器台、ロクロ成形後内面または内外を丁寧にヘラミガキして黒色処理を施した高台坏、坏などがあり、他に少量の手捏ね小皿、手捏ね小形甕、ロクロ甕、ロクロ非使用の甕が出土している。この中で圧倒的に多いのはロクロの小皿、坏、内面黒色処理の高台坏、坏である。

(3) 11世紀厨川周辺の土器

赤裳遺跡のある岩手郡と、斯波郡北部地域における11世紀の土器群について、鳥海柵跡の土器編年（金ヶ崎町教育委員会2003）、奥六郡や周辺域の編年研究成果（羽柴2011、井上2014、津嶋2015他）等を参考にしながら編年を試みた。11世紀前葉から中葉にかけて概ね4段階に区分される。なお11世紀後葉の土器群は、岩手郡～斯波郡北部域では今のところ資料が乏しいため、ここでは割愛する。

11世紀前葉古段階の資料として、盛岡市本宮の大宮北遺跡（盛岡市教育委員会2013）、向中野の台太郎遺跡（同2018）に代表される。土師器のロクロ坏、高台坏、小形坏、内面黒色処理の坏と高台坏が主体であり、大宮北遺跡では器高の低い皿状の坏が伴う。高台坏にはリング状高台と底が厚く高い柱状高台がある。ヘラミガキ・黒色処理

の高台坏のリング状高台には底部外周に粘土紐を周回させるものがある。

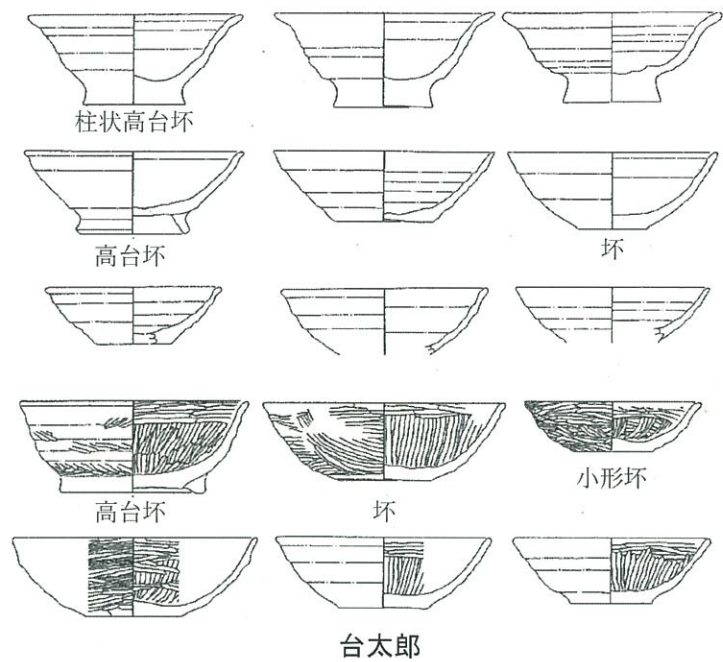
11世紀前葉新段階には、大新町遺跡（RE701）、宿田遺跡、上堂頭遺跡、小屋塚遺跡、高松神社裏遺跡の土器群があげられる。大新町遺跡では圧底の外周に高台を回したヘラミガキ・黒色処理の高台坏が主体を占め、小形の坏や小皿が伴う。高松神社裏遺跡では小皿、小形坏、坏、器高の高い坏、体部が直斜状に外傾する高台坏、ヘラミガキ・黒色処理の高台坏のほか、ロクロを使用しない土師器の甕がある。上堂頭遺跡のロクロ坏は、高台の作りが次の段階の赤裳遺跡のロクロ坏に近似している。

なお、大新町遺跡と高松神社裏遺跡をはじめ、各遺跡の高台の形状に差異が認められる事などから、この段階の資料がさらに細分化される可能性もある。また前段階の台太郎遺跡や大宮北遺跡の土器と比較しても土器の形状や特徴に差があることから、11世紀前葉古段階の資料がやや遡る可能性があるほか、古段階と新段階との間を埋める資料が、今後出現する可能性も考えられる。今後の資料の蓄積に期待したい。

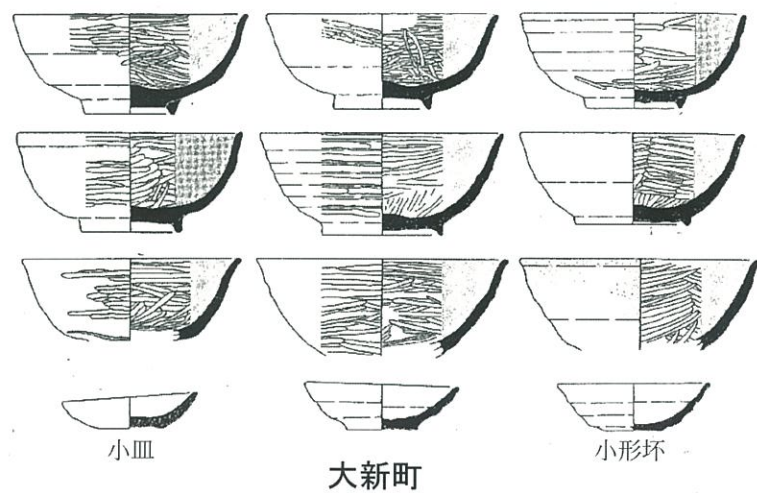
11世紀中葉古段階の資料には、赤裳遺跡出土土器群と大新町遺跡（RD702）出土土器が該当する。この時期も依然としてヘラミガキ・黒色処理の土師器高台坏が多く認められ、高台はリング状高台も残るが、総じて高台は低めになり、圧底の底部外周に、粘土紐を僅かに貼り付けた、いわゆる疑似高台が主体になる。ロクロ坏は器壁が厚く、大ぶりの器形が増えてくる。坏や小皿の内面は、布か、柔らかい革のような工具で平滑に調整され、ロクロの水挽き痕跡がほとんど分からないものがある。

小皿の出土量が大幅に増加し、柱状高台やリング状高台の小形器台、ごく少量であるが手捏ねの土器にはロクロ成形後に手捏ね成形した小皿や、口縁部が内湾する内外ヘラミガキ・黒色処理の托鉢のような鉢も存在する。

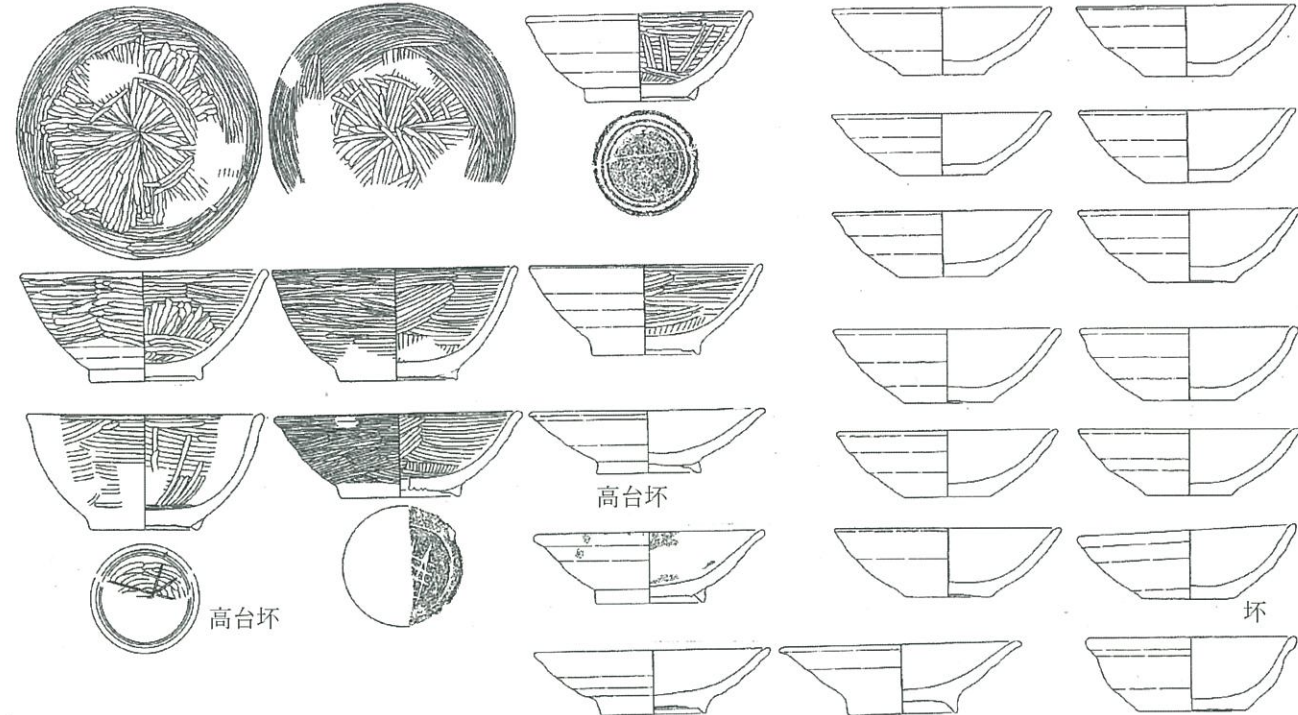
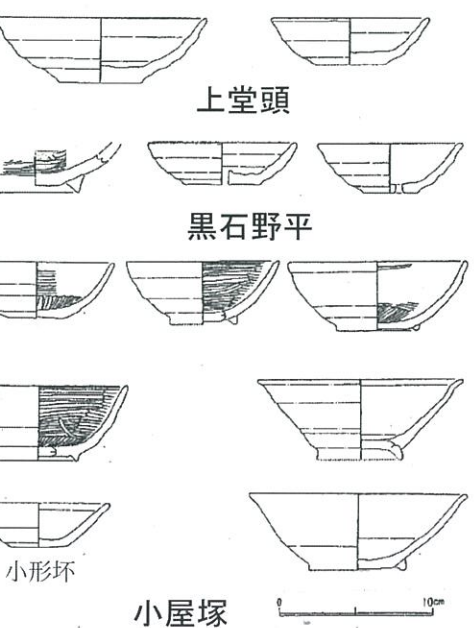
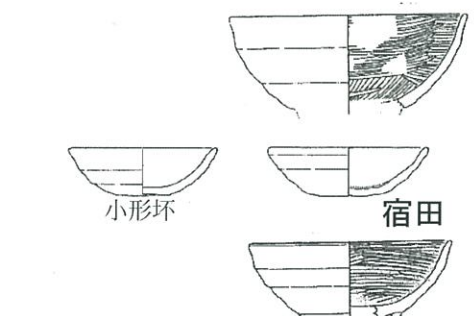
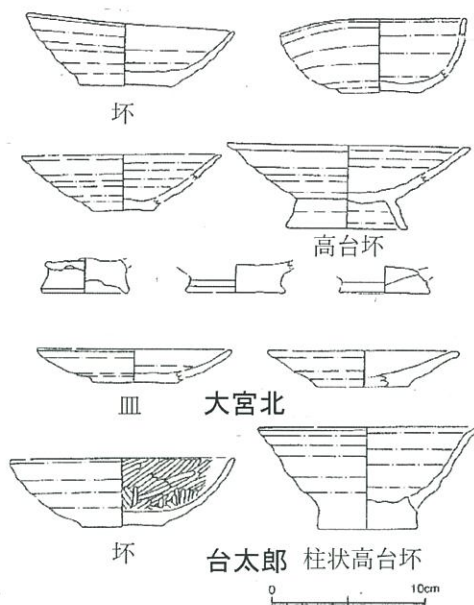
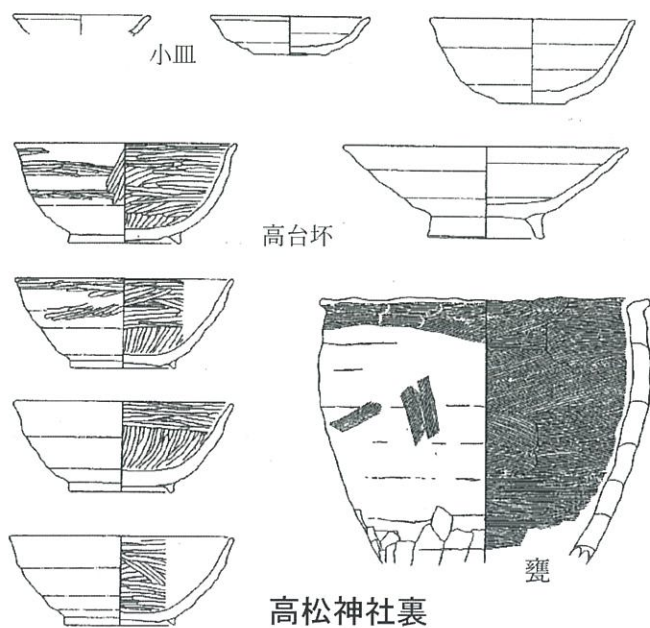
11世紀中葉新段階の資料には、滝沢市大釜の大釜館遺跡出土資料がある。ロクロ坏は大ぶりで



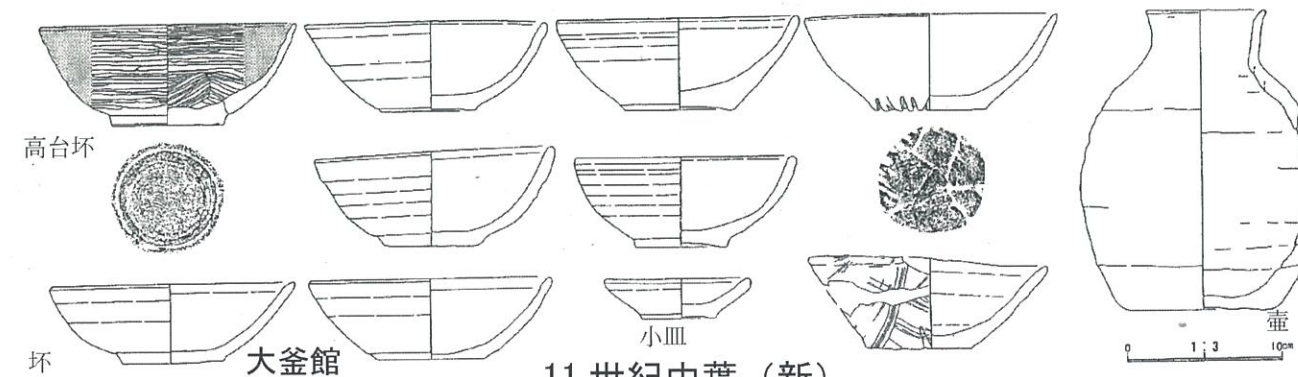
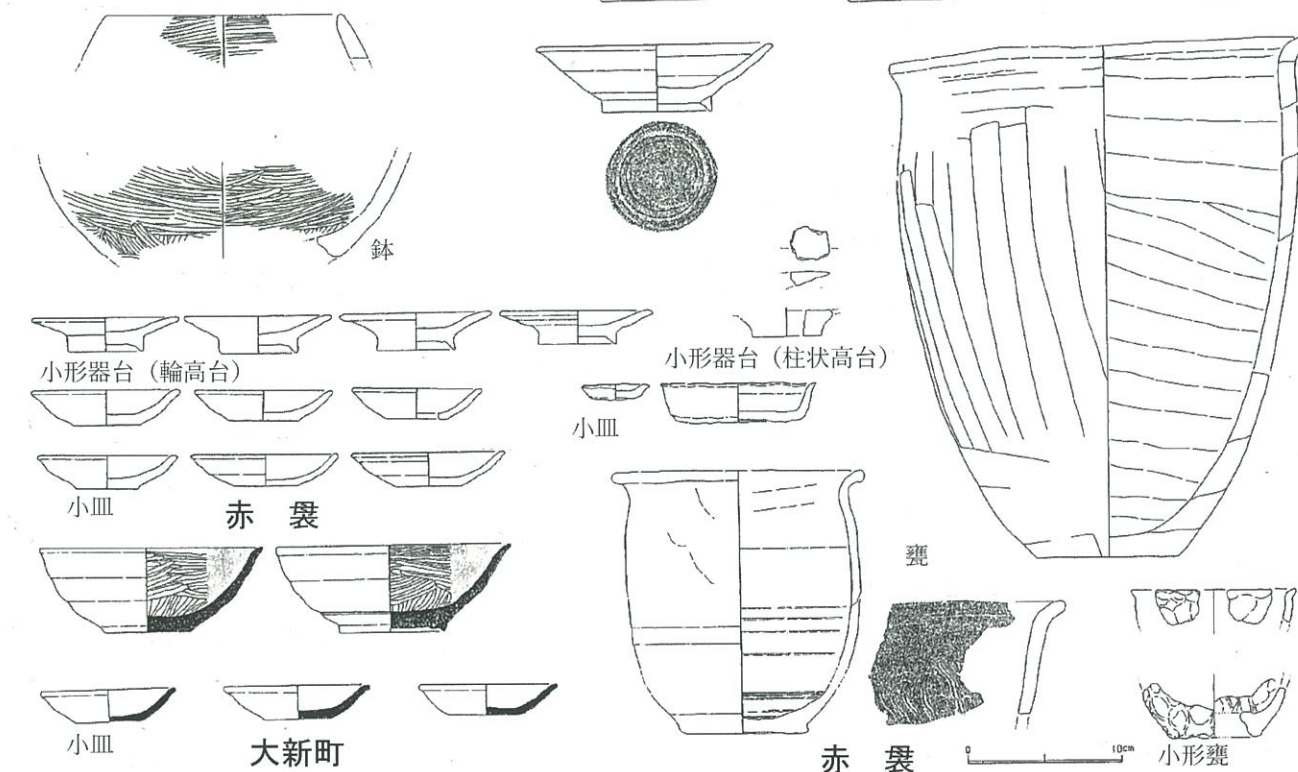
11世紀前葉(古)



11世紀前葉(新)



11世紀中葉(古)



11世紀中葉(新)